

長谷川信子 (2006) 「日本語の主文現象と統語理論：今、主文現象が面白い」 *Scientific Approaches to Language*, No.5, pp. 1-8. 神田外語大学, 言語科学研究センター.

日本語の主文現象と統語理論： 今、主文現象が面白い

長谷川 信子
神田外語大学

日本語の主文現象を「今」理論的視点をもって考察することの意義を、日本における日本語の統語研究および理論研究の観点から、また、統語理論の変遷と今後の発展の観点から、論じる。近年、理論が抽象度を増し、様々な言語の現象に対応できるシステムとなりつつある反面、その抽象性故に、個別言語の持つ具体的な現象から乖離してきている、すなわち、理論的概念のみが一人歩きし、その理論の方向性と正しさを証明するはずの言語現象の観察がおろそかになってきている、との感を持つ者は少なくないであろう。しかし、理論の発展は、同時に、何が統語論プロパーな領域なのかという本来的な問題に再考を促しており、これまで語用現象として統語的考察から外されてきた現象にも統語理論の観点からアプローチすることの意義がこれまでとは異なった形で認識されつつあると思われる。このことは、今後、日本語の主文現象を軸に、理論的にも、記述的にも、新たな言語研究の波を起こすことができるのではないかと期待を抱かせるのである。

1. はじめに

本 SAL 第 5 号は、2006 年 2 月 11 日・12 日の 2 日間、本研究センターの主催により開催された『日本語の主文現象と統語理論』と題したワークショップで発表された論文を集めたものである。残念ながら、発表論文の何本かは掲載が叶わなかったが、ここには、ワークショップで扱われた多くの興味深い現象と、それらの記述・説明にむけての重要な分析・提案が、満載である。

今回「日本語の主文現象」とテーマを絞ってワークショップを開催したことには、いくつかの理由がある。まず、第一に、日本語に限らず、主文現象についての生成統語理論からの知見は、生成文法初期の標準理

論時代から大して進展しておらず、非常に限られている、という事実がある。第二に、日本における日本語研究においては、取り立て詞やモダリティ現象など主文現象に対する関心は、伝統的な国語学や日本語教育にも通じる日本語研究も含め、非常に高く多様、かつ記述も豊富で、統語理論がこの現象を扱うなら、日本における日本語研究は、これまで以上にバランスよく発展するであろうとの見通しが持てることである。そして、第三に、以下により詳しく述べるが、統語理論の発展の流れにおいても、主文現象を扱うことが必然となりつつあると思われ、英語などの欧米言語に比べ、主文現象がより豊富かつ多様であると思われる日本語を扱うことにより、日本語から理論への貢献が、これまで以上に期待できると思われるのである。つまり、日本語の主文現象を統語理論との関わりで考察することは、日本における日本語研究にも新たな視点を提供し、統語理論の発展へこれまで以上に日本語から寄与できる、そして、それと共に、GB 理論以降、統語理論が抽象化され過ぎ、実際の言語現象から乖離し始めている（それ故、言語現象に興味を持つ者の理論への興味が薄れてきているように思われる）統語理論研究に、これまで深く考察されてこなかった新たな経験的言語現象を提示することができるように思えるのである。

以下では、私見の域を出ないが、統語理論の変遷の観点から、主文現象がどのように位置づけられか考えてみたい。またそうすることで、日本語という言語の特性についても考えてみたい。

2. 統語理論と日本語の統語現象

統語理論は、言語における「音と意味をつなぐシステム」の解明を目指し、それに対し、文構造の観点から迫ろうとしてきたと言えよう。次頁の図は、言語の音と意味を繋ぐ体系に見られる各部門間の関係を簡略して示したものである。

「音と意味をつなぐ体系」の観点からは、以下の図に表された領域全てが理論の研究対象となる筈であるが、生成統語論はその発展初期から、

「命題」としての文構造を扱うこと、すなわち、中心に整備されてきた。そして、文の生成を、派生という概念で捉え、その出発点を、述語の項構造情報の構造的表出（いわゆる D 構造）とし、その帰着点を論理的な命題構造（LF、論理形式）とした体系を仮定している。統語研究の中心領域であるの中心課題は、その上下の点線部分（の変遷）により拡大されたものであるが、述語の項構造に時制などの機能範疇が加わった「命題」の構造である。それが、最も端的に表されているのが補文であり、補文と主文の関係、補文からの移動、補文のタイプ分け、などは生成文法の初期から最も頻繁に考察されてきた現象である。この部分に、疑問詞疑問文や数量詞の作用域などの現象を加えた LF までが、これまでの統語理論の「守備範囲」とされてきた領域である。そして、英語などの言語に関する限り、LF を含めたの部分に、かなりの統語現象が含まれ、それらの考察が統語理論の発展と関わる経験的基盤を担ってきたと言っても過言ではないであろう。

<A>	Lexicon 語彙の情報、述語の意味タイプ・アスペクト、など 語形成プロセス	
	述語の項構造	vP (phase)
	(D 構造) Syntax (命題) 述語の項構造+時制+ α 補文構造、移動現象、文内要素の一致 (S 構造)	論理学 述語論理
	LF (論理形式) 疑問文 数量詞の作用域 命令文、Topic、Focus [文の FORCE] CP (phase)	命題論理 (情報・論理計算の単位)
<C>	発話・語用的機能 断定、質問、命令、依頼 話者の視点、談話、文と文との関係、前提、文体、など	Pragmatics

一方、上記の図との関係で、日本語の言語現象を考えてみると、文型といった統語研究の基本と思われる一般化でさえも、から外れる部分が非常に多いことに気づく。例えば、「基本文型」は、英語のそれは、述語の項構造とほぼ同義であり、広く定着しているのに対し、日本語で

は、文法家の間でも統一見解が見られないばかりでなく、「ハ-ガ構文」「ニ-ガ構文」といった格配列や、上記では<C>の部類に入る、主題や話者の視点といった観点に言及することも多い。また、語の定義や意味に関しても、使役のサセや受動・可能のラレもそうだが、自他の対応と関わる形態素や複合動詞、スル構文など、英語のような言語に比べ、述語や形態素の示す項構造と「命題」の関係が明確ではなく、出発点としての<D 構造>が定めにくい。そして、このことは、近年、非常に研究が進んできている語彙概念構造の観点からの研究でも明らかにされてきており、日本語には<A>、および<A>とが関わる現象が非常に多様で、興味深い形で表出しているように思われるのである。

逆に、統語に固有である本来の現象については、主語の位置や格付与といったでは最も基本と考えられるものでさえ、研究者間で合意には達していない。さらに、日本語の生成文法研究では、の現象を考察するに当たって、文末にコトを付けることによって<C>の現象から独立させて文法性を判断するという方法がよく使われているが、それは、とりも直さず、日本語ではの現象が一義的言語データとしては表出していないことを伺わせる。

上記の事実は、多少穿った見方をすれば、日本語には英語などの言語に比べ、本来の現象が、アプローチしやすい形では現れてはきていないことを示しているとは言えないだろうか？このことが、日本語を扱った生成文法研究が1960年代後半から非常に豊富に、かつ高度なレベルで成されてきているにも関わらず、それらの成果が日本における日本語研究に広く浸透しているわけでもないという事実、さらには、生成文法・普遍文法の観点からさえ、日本語とは如何なる言語か、という問いに対する統一的な見解が未だ得られていないという事実、と無関係ではないと思えるのである。そして、そうした事実が、生成文法は、英語などの(の現象が豊富な)言語の分析には適しているが、日本語のような(<A>や<C>に関わる現象は豊富だがの現象は限られている)言語には、それが、如何に普遍文法としての理論であるとしても、そのまま日本語に適用し有効であるという保証はない、という懷疑

的な見方へと繋がっていると見えそうである。しかし、もし今、統語理論研究の方から、こうした日本語の現象と理論研究の溝を埋める研究課題と成果が提示されたなら、この不幸な状況はかなり改善されるだろうと思われる。

生成文法研究により、日本語においても、領域における「命題としての統語構造」についての知見が豊富に得られ、サセやラレのような形態素も実は補文を持つ構造であること、複合述語にはいくつかのタイプがあることなど、また、数量詞の作用域や移動現象などC統御を含めた構造的関係性が日本語のような「平板な」言語にも成り立つことなど、伝統的な国語学や表面的な記述を中心にした研究では到達し得なかった知見が獲得できたことは確かである。しかし、の命題を中心に据えた理論に固執する余り、日本語の現象から考察を始めたならば、当然その研究対象になったであろう<A>や<C>と関わる現象に十分な注意が払われて来なかったことも事実であると思われる。

今、統語理論の変遷を振り返ってみると、GB理論は、領域を中心とした理論の集大成であったと言えよう。GB理論は、明確に項構造(D構造)を起点とし、LFを着点とすることにより体系化された理論なのである。そして、90年代後半以降、ミニマリスト・プログラム(MP)の作業仮説が提示されるとほぼ軌を一にして、<A>の現象への注目が集まり、上記でも触れたが、非常に生産的な研究が多く為されてきたのは、決して偶然ではない。MPの元では、統語の起点とされてきたD構造の存在理由が問われ、派生の起点であった筈の項構造とそれを生み出す道筋自体も統語現象として考察する可能性が広がったからである。それでも、項構造情報は統語構造的にはvP範疇に、GB理論ではD構造で捉えられていた一般化と制約がある程度保持され、それが、統語構造の現象解明に重要な役割を果たすレベル(phase)と関わることには変わりはない。しかし、MPの枠組みでは、<A>の領域にあると思われる述語の内部構造や項構造にもで有用であるメカニズムや概念(句構造と関わる主要部移動やC統御など)が当てはまるとの仮定の下に、<A>現象も同様、統語理論の領域に属するものとして、様々な分析

が提示されてきており、この傾向は今後も続くであろうと思われる。

3. 主文現象と統語理論

そして、以下がワークショップと本号の趣旨と関わる部分だが、統語的派生の着点とされてきた命題の論理構造 (LF) においても、そこが然るべく着点であるという明確な必然性はない。確かに、論理的な推論や演算において、文の情報と意味は LF 表示が為されれば事足りるという可能性は否定できない。しかし、言語にはそうした論理的意味以上に発話・語用と関わる機能なり FORCE なりがあるわけで、実際、<C>の現象と思われる「命令」「質問」「依頼」「感嘆」といった文の発話機能は、それと対応した特定の統語構造や構文を持つことを考えると、従来、GB 理論などで<C>の現象が統語現象とは切り離されてきたこと自体が不思議であったと言えないだろうか。MP の考え方では、<A>が統語研究の対象となり得るとの方向性と同じく、<C>も統語理論の範囲である可能性もあると思われるのである。もちろん、無制限にどんな語用現象も統語理論の守備範囲として扱うことを主張しているわけではない。多少逆説的だが、<C>の現象のうち何が統語理論の研究対象になるかは、これまでのの現象を中心に扱ってきた統語研究の知見から、答が出るように思われる。すなわち、<C>の現象にも、の現象の考察に向け整備されてきた構造とメカニズムの観点から解明できるものが見られるなら、それは統語理論の対象となり得る可能性を持つと思われるのである。より具体的には、<C>の現象にも、句構造の概念とそれと関連した主要部と指定部、補部の関係性、移動の方向性、最短・最小・局所性といった Minimarity に集約される関係性、など、が当てはまり、そうした統語的概念とメカニズムで新たな事実が判明し、これまでとは異なった形で記述・説明される現象が特定化できるなら、それらも統語理論の守備範囲内の現象として扱われるべきであろうと思われる。

そして、日本語の現象の記述・説明の観点からは、上述したように、日本語には、<C>に属すると思われる現象が非常に多様で豊富である

と思われるのである。今回のワークショップおよび本号でも示されているが、命令文や依頼文などの発話機能と文構造、様々な条件節と主文の語用的機能の関係、モダリティに代表される話者の判断、クレルなどの授与動詞に代表される話者の視点現象、談話レベルと関わる省略、特定の人称の主語と述語の関係、丁寧体や会話体などの文体の相違、右方転移や取り立て詞など主文に特化した現象、などは、〈C〉と関係する語用機能と連動しているものが多いが、同時に、統語構造的にも明らかな特性が見られるのである。こうした現象を、〈B〉などの現象と同様の統語的な構造とメカニズムにより解明できれば、当該の現象の新たな記述と説明だけでなく、〈C〉と統語理論の関係、ひいては、〈C〉にも対応可能な統語理論の構築へと、理論研究に寄与する可能性は大いにあると思われる。

さらに、この方向性には、もう一つ、理論的な観点からのメリットがある。上記で、従来の項構造のレベルがMPではvPとして、一つのphaseを形成していると述べたが、〈C〉に関しても同様に、命題を越えたレベルとしてのphaseが形成されると思われる。phaseという概念が実際に統語理論においてどういう役割を果たしているのかは、今後更に明らかにされなくてはならないが、それが、項構造〈A〉から命題〈B〉へ、そして命題〈B〉から語用的な機能を持つ文〈C〉へと派生する上で、統語現象の単位になっている可能性は大きいだろう。そして、その最終単位が主文としてのphaseだとすると、主文現象こそ、統語構造の派生の着点の解明に繋がる現象であると思われるのである。

4. おわりに

上記に記した統語理論の変遷と考え方に少しの真実があるのだとすると、言語間の違いに関しても、従来の語彙範疇素性のあり方との関わりだけでなく、もう少し大枠での違いを視野に入れた研究が可能となるように思われる。すなわち、統語現象は〈A〉にも〈B〉にも〈C〉にも現れるのであるが、どのレベルに頻出するかが言語によって異なるという

仮説である。どのレベルも、同様の統語メカニズムを採用するとしても、具体的な現象は、英語ではに、日本語では<A>と<C>に多く現れるという可能性はないだろうか。つまり、GB 理論などにおいて、一つの現象（例えば、疑問詞疑問文の構造と解釈）が英語では可視的移動により、日本語では非可視的に LF で捉えられるという提案がなされたが、上記の考え方が正しいとすると、文の構造と機能、および解釈においても、命題（TP）レベルを多用する英語などの言語と、語用（CP）レベルで全うさせる日本語などの言語があり、それが言語間の相違を記述・説明するパラメーターとなるといった考え方である。そうだとすると、日本語の日本語らしい現象を扱うことが、直接的に統語理論の構築に繋がり、その整備には日本語のような現象の考察が不可欠であるということになる。そして、このような認識の元では、統語理論研究も、これまで統語理論とは一線を画してきた日本語の研究とも密接な接点を持つことになり、相互に活性化し合う研究へと発展できるのではないかと期待したいのである。そうした、願いを込めてワークショップを開催し、本号を編纂した次第である。そして、本号に収録された論文を、上記の観点から、読んでいただけるなら、結論はどうあれ、これまでとは多少異なった新しい観点での統語研究が花開くことに繋がるのではないかと思えるのである。

〒261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学 言語科学研究科

hasegawa@kanda.kuis.ac.jp